

『紅樓夢』の思想的研究序論

王 竹

はじめに

清朝第六代皇帝乾隆帝（1735～1795在位）は、父祖康熙帝・雍正帝の遺業を継承しただけでなく、豊かな財政と強大な軍事力を背景に、西域を国土化し、チベットをも支配下において、清朝の全盛期を導いたといわれる。

異民族の清は、元（1271～1368）の轍を踏むことがないようにと、中国の伝統、すなわち漢民族の歴史と文化を尊重する方針を立てた。それは康熙帝による『全唐詩』編纂や雍正帝による『明史』編纂などに顕著であるが、乾隆帝もまた父祖の意志を受け継いで『明史』を完成させ、更には、先秦から清代前半に至る歴史的典籍約三千五百を収録する最大の叢書『四庫全書』を編纂するなど、中国の伝統的文化事業を積極的に行った。そのため、漢民族知識人を多く重用し、彼らを優遇して文化事業を推進したのである。

しかし、それは漢民族知識人が異民族王朝の政策のもとに文献の中に沈潜させられたことを意味する。すなわち、漢民族知識人を政治から遠ざけ、知識人の思想統制を断行し、しばしば文字の獄や禁書が行われた。康熙帝に始まる輝かしい文化事業が清王朝の光だとすれば、それと並んで起きた文字の獄や禁書は、清王朝の暗い影である。

* 本学文学研究科博士後期課程

キーワード：『紅樓夢』、莊子、脂硯齋、王国維、胡適、

もちろん、知識人の弾圧や禁書は、古くは始皇帝の焚書坑儒や後漢の二度にわたる党錮の禍のように、中国の歴史に珍しいことではない。しかし、清朝の文字の獄は、その頻度も、漢人による政治批判を封殺して言論統制を極めたことも、それ以前の比ではないといわれる¹⁾。中国近現代史学の先駆者として知られる柳詒徴（1880～1956）は、清朝の文字の獄について次のようにいう。

清朝以前の文人も文字の獄に遭遇したが、その悲惨さは清代の文字の獄ほど酷いものはなかった。だから、雍正帝・乾隆帝以来、節操のある学者は跡形もなく消え去った。……ほんのわずかな不注意から、不測の禍を招いてしまった。

前代文人受禍之烈、殆未有若清代者。故雍乾以来、志节之士、荡然无存。……稍一不慎、祸且不测²⁾。

清朝文人を襲った文字の獄は歴史上最も惨烈であり、彼らは知識人としての志や節操、信念や自尊心など、すべて心の中に封印せざるを得なかった。表向きは華やかな文化事業と、文人が重用された乾隆帝の時代であったが、その実は、良識ある知識人は自らの意思で文章を書くこともできず、思想の取り締まりの恐怖の影に苦しめられた、極めて暗い時代であった。

長篇白話小説『紅樓夢』が書かれたのは、まさにこのような時代であった。作者に関してはいまだに不明なところが少なくないが、今では曹雪芹（1724?～1764?）とするのが定説となっている。

小説は、仙界の石ころの化身である主人公宝玉が人間界で経験したことの記録という体裁を取っている。宝玉は大貴族買家の公子として設定されており、多くの女性たちに囲まれて広大な別荘大観園で暮らす。しかし買家の盛運は徐々に衰え、周りの女性たちも次第に離れていく。宝玉と女性

『紅樓夢』の思想的研究序論

たちを中心に展開していくこの物語は、そこに生きるさまざまな人々の喜怒哀楽を通して、清朝全盛期の華やかな社会に生きる人々が、実はいかに悲劇的な人生を歩んでいるかを克明に描き出している。

しかし、政治批判を厳禁した時代に生まれた『紅樓夢』が描くのは登場人物の悲劇だけではない。当時の汚濁した社会、官僚の腐敗や不正、人々を束縛して悲劇をもたらす儒教道徳を浮き彫りにし、現実政治に対する痛烈な批判を意図した小説である。

ところで、中国の知識人は古来儒家であると同時に道家であるといわれる。賈誼や司馬遷、あるいは陶淵明や蘇軾を持ち出すまでもなく、中国の知識人が現実世界で生きていくには儒家としての教養を身につけるのが必須である。彼らは理想を持って官界に進出したが、現実社会は彼らの理想を実現するにはあまりにも複雑で、世の中を良くするところか、自分の身を守ることさえできない場合が少なくなかった。儒教の限界を思い知らされ、個々人の精神を束縛する儒教の本質に疑問を抱くと、彼らは老荘の世界に精神的な救いを求めた³⁾。

知識人の家庭に生まれ曹雪芹もまた儒家の影響下に育った。しかし、曹雪芹は彼らと同じではない。儒家と道家の間で精神的バランスを取った古代の知識人と違い、曹雪芹は儒家社会が束縛している人間の哀れな姿を容赦なく暴き出し、現実の悲喜哀歓の世界から解放してくれる境地を『莊子』の世界に求めたと考えられる。

筆者は『紅樓夢』の随所にみえる『莊子』を手がかりに、曹雪芹の人間観（死生観）や社会観を解明して『紅樓夢』の思想的研究を進めている。本稿はその序論として、本研究の具体的方法を提示し、かつ新たな問題提起をするものである。

一 『紅樓夢』研究

まず、中国と日本における『紅樓夢』研究の歴史を振りかえりながら、問題点を整理したい。

清朝末期にすでに「紅学」と称されたほど盛んであった『紅樓夢』研究は、「旧紅学」と「新紅学」とに二分される。

「旧紅学」とは、五四運動（1919年）以前の研究、すなわち胡適（1891～1962）の『紅樓夢考証』が世に出るまでの以前の諸説を指す。具体的には、周春（1729～1815）・蔡元培（1868～1940）・王国維⁴⁾（1877～1927）に代表される研究を指し、それらは随筆形式で作品に批評点描したり（評点派）、清代の政治事件との関連から書中に隠された「真事」を探ろうとしたりする（索隠派）もので、実証に基づかない趣味的な研究がほとんどであった。

それに対して、「新紅学」は考証学に基づく研究、すなわち、資料の収集と分析に基づく実証的研究をいう。その最大の成果のひとつが胡適（1891～1962）の『紅樓夢考証』で、彼は作者が曹雪芹であること、『紅樓夢』が曹雪芹の自叙伝であることを論証した。そして、胡適とともに新紅学の基礎を作った俞平伯（1900～1990）は『紅樓夢辨』を著し、その研究成果は後の紅学研究者に受け継がれて今に至っている。この点については後に改めて論ずる。

一方、日本における『紅樓夢』研究は以下の五つの時代に区分できる⁵⁾。
(1) 日本紅学の確立時代（1793～1893）

1793年、南京船によって長崎に渡来した⁶⁾『紅樓夢』は、すでに明治時代、東京外国語学校で中国語の教材として使われ、1892年（明治25年）には、漢学者・森槐南（1863～1911）による初の邦訳が生まれている。また、同年、森槐南は「紅樓夢評論」を『早稲田文学』第27号に発表した。日本

『紅樓夢』の思想的研究序論

の紅学研究はこれより始まるが、中国の紅学研究の影響を受けながら進められた。

(2) 日本紅学の転換期 (1894～1938)

この期間、『紅樓夢』の邦訳は盛んであったが、研究はあまり進まなかった。1920～22年、幸田露伴(1867～1947)・平岡龍城(生卒年不詳)共訳の日本初の前八十回訳本が「国訳漢文大成」の一つとして刊行された。これは有正本⁷⁾を底本としたものである。また、この転換期の紅学研究代表者としては、『紅樓夢研究』を著した大高巖(1905～1971)がいる。氏が『紅樓夢』を愛読し、小説の文化、芸術、科学などを考察し、多くの論文を発表し、日本『紅樓夢』研究史上に重要な学者とみなされる⁸⁾。ただ、紅学の確立時代も、この転換期も、当時の漢学者にとっての関心事はもっぱら中国の歴史・哲学(經学)・言語・詩詞の研究であって、小説は研究対象とはならなかった。

(3) 日本紅学の沈滞期 (1939～1955)

第二次世界大戦のため、この時期の日本紅学は、論文の数も少なく沈滞していた。しかし、邦訳では大きな成果がみられた。大学時代より『紅樓夢』を愛読していた松枝茂夫(1905～1995)は、戦争による中断を余儀なくされたものの、前後11年をかけて本邦初の百二十回全訳を完成させた。

(4) 日本紅学の復興期 (1956～1978)

戦後、中国大陸では政治的理由から紅学研究が批判を受け、以後22年もの間、紅学研究が途絶えたのだが、逆に戦後日本の紅学研究は、政治的桎梏から逃れて純粋な学問研究が増えた。この時期、日本の漢学界で紅学に最も尽力した学者は伊藤漱平(1925～2009)であろう。氏は1954年に「曹霑と高鶚に関する試論」⁹⁾を発表して以来、五十年以上にわたって『紅樓夢』の研究と翻訳を続けている。氏の研究は曹雪芹の生涯、歴史、脂硯齋の評語、『紅樓夢』の版本、小説に至る経緯等々、その研究領域は非常に

広い。日本の紅樓夢研究の第一人者である。また、この時期は『紅樓夢』の翻訳も新たな展開があった。最も注目された訳本は、氏の完訳本（平凡社）である。この訳本の前八十回は兪平伯校訂『紅樓夢八十回校本』、後四十回は校本付録の程甲本を底本としたものである。

(5) 現代の日本紅学（1979～現在）

この時期の最も顕著な成果は、飯塚朗（1907～1989）の翻訳である。氏は人民文学出版社本を底本として翻訳し、1980年、集英社「世界文学全集」の一つとして刊行された。また、合山究（1942～）『『紅樓夢』新論』（汲古書院、1998年）と船越達志（1969～）の『紅樓夢成立の研究』（汲古書院、2005年）が最近の研究成果である。また、近年、合山氏は『『紅樓夢』——性同一性障碍者のユートピア小説』（汲古書院、2010年）を発表し、『紅樓夢』は当時の封建的男性社会の中で生きていくことができなかった性同一性障碍者が夢想したユートピア小説であるという説を提起している¹⁰⁾。

しかし、これまでの中国及び日本の『紅樓夢』研究の歴史をみてもわかるように、『紅樓夢』は小説としての成立過程や、作者の生涯、あるいは版本、そして続作をめぐる研究が主流であって、『紅樓夢』の思想に言及するものは非常に少ない。『紅樓夢』は人間の生き方、社会のあり方、家族、金銭、愛情など、現実世界のあらゆる問題が描かれるだけでなく、中国伝統文化——儒・仏・道の文化が見え隠れしている。先述したように、儒家社会に生まれ育った曹雪芹は、現実社会に横たわる不条理、あるいは儒教そのものが内包する非人間性に疑問を抱き、儒教が個人にもたらした悲劇の数々を徹底的に暴き出し、『莊子』の思想が人間解放の道であると訴えようとした。

二 『紅樓夢』研究の四ジャンルについて（1）——版本学

ところで、『紅樓夢』の研究は、版本の比較研究を主とする版本学、脂硯齋の評論を中心に研究する脂学、失われた八十一回以後を探求する探逸学、曹雪芹および曹氏一族を研究する曹学の四ジャンルに分類される¹¹⁾。

『紅樓夢』の原稿本は伝わらず、直接の写本も伝わらないため、現存のテキストはすべて「脂硯齋本」——脂硯齋の評論がある脂批本を底本としている¹²⁾。乾隆五十六年（1791年）に『紅樓夢』と題する刊本、いわゆる「程高本」¹³⁾が刊行されるまで三十年以上にわたって通行していた抄本（写本）は、『脂硯齋重評石頭記』として通行していた。そのうち、最も古い抄本は、曹雪芹没後間もない1764年（一説に1763年）に流布していた八十回の抄本で、それが『脂硯齋重評石頭記』と題してあったことから、『石頭記』の名が世に広まり、それが定着していったと考えられる。

版本学とは、主に原稿に近い写本（脂批本）を対象として、諸本の関係、文字の異同等を研究するものである。現存のテキストはすべていわゆる「脂硯齋本」——脂硯齋の評論がある評本（脂批本）であるが、これらはいずれも八十回のものか、あるいはそれに満たないものである。このことは、曹雪芹の原作部分は八十回までしか伝わっていないということの意味する。それに対して、刊行された程高本（乾隆五十六年（1791）の刊本『紅樓夢』いわゆる「程高本」）は、後人の続作四十回を加えて百二十回としたテキストである。版本学はこれら両者を研究対象とする。

現存する種々の抄本は、写本の宿命ともいべき誤写や誤脱も多く、中には脂硯齋の評文が削り去られたものなどもあり、曹雪芹のオリジナルを判定することは難しい。また、当時、どのような経緯で『石頭記』の抄本が人々の間で伝えられたのか、現存する資料からは明らかにできない。ただ、乾隆中期には脂批本八十回『石頭記』抄本が増えたことは間違いない。

乾隆末期には多くの抄本が市場で売買され、中には「数十金」の高値がつくものが出るほど、好事家が競って求めたということからも明らかである¹⁴⁾。

ところが、乾隆期の写本の中に『石頭記』ではなく、『紅樓夢』と題するものがあることが判明した。乾隆四十九年（1784年）の写本、いわゆる甲辰本である。そもそも『紅樓夢』と『石頭記』の名称は、最古の原本に近い『脂硯齋重評石頭記』の「甲戌本」（1754年）¹⁵⁾にあるように¹⁶⁾、最古の抄本とされる「甲戌本」には、『紅樓夢』、『石頭記』、『風月宝鑑』複数の題名があげられ、いずれも、小説の題名としての的を射ているという。いずれも曹雪芹自身が使っていたことも、当時から一つの題名に決まらなかった原因である。それが現在に至るまで、二百年以上にわたって『紅樓夢』として人々に愛読されたのは、この甲辰本『紅樓夢』がそれまでの『脂硯齋重評石頭記』に変わって喧伝されたことによる。

さて、曹雪芹の原稿本の面影を比較的忠実に伝えたとされる版本は、脂硯齋本に属する写本のうち、曹雪芹の生前または死後まもなく原本が成立した脂硯齋評本の三種類の転写本である。その原本が成立したと考えられる乾隆十九年（1754年）、二十四年（1759年）、二十五年（1760年）の干支に因み、それぞれ「甲戌本」（十六回残存。1927年、胡適が発見）、「己卯本」（四十回残存）、「庚辰本」（七十八回残存。1932年、徐星福が所蔵していたものを胡適が考証）とよばれる。これらは最も古い写本と考えられるが、残念ながら八十回すべてがそろったものはない。

次に、乾隆四十九年（1784年）、五十四年（1789年）の「甲辰本」（八十回存）、「己酉本」（四十回残存）がある。また、後に発見された「科学院文学研究所蔵本」（「乾隆帝抄本百二十回紅樓夢稿」と題する、夢稿本を略称）、「蒙古王府本」, 「アジア諸民族研究所レニングラード蔵本」, 「鄭振鐸所蔵本」（鄭蔵本）, 「南京靖応鷗蔵本」¹⁷⁾（散逸）も乾隆後期の写本と考え

『紅樓夢』の思想的・研究序論

られ、その前八十回は脂評本の系統に属する。

また、民国初年、上海有正書局から石印刊行された「戚蓼生序本」（戚序本と略称）は、『原本紅樓夢』と題する大字本（1912年）と小字本（1920年）の二種がある。その底本は焼失したが、甲辰本以前の写本と推定される。そして、1975年、上海古籍書店が四十回の「戚滬本」を発見し、また、南京図書館で戚滬本からの写本と思われるものが（戚寧本）発見された¹⁸⁾。

以上、散逸した「南京靖応鷗藏本」と石印本「戚蓼生序本」を除けば、現存の抄本は以下の十一種がある。

- (1) 『脂硯齋重評石頭記』（甲戌本）
- (2) 『脂硯齋重評石頭記』（己卯本）
- (3) 『脂硯齋重評石頭記』（庚辰本）
- (4) 『紅樓夢』（甲辰本）
- (5) 『紅樓夢』（己酉本）
- (6) 『乾隆帝抄本百二十回紅樓夢稿』（夢稿本）
- (7) 『蒙古王府本石頭記』（王府本）
- (8) レニングラード藏本『石頭記』（列藏本）
- (9) 鄭振鐸所藏本『紅樓夢』（鄭藏本）
- (10) 『国初鈔本原本紅樓夢』（戚滬本）
- (11) 『国初鈔本原本紅樓夢』（戚寧本)¹⁹⁾

しかし、『脂硯齋重評石頭記 甲戌本』（作家出版社、2004年）の校訂者鄧遂夫が指摘するように、現存する十一種の脂批本の源（底本）が何か、どのような流伝であったのか、それぞれの関係も含めて定論がない。また、それらと「程高本」との間に具体的にどのような進展や変化があったのかも明らかではない²⁰⁾。

版本をめぐる研究は、『紅樓夢』の創作年代、あるいは成書の過程、流布の過程などを知るために価値があるのみならず、これら十一種の手抄本

の脂批を比較することによって、今なお未解決の問題を解明する可能性を示してくれている。

版本発見の最大の意義は、脂硯齋と脂批とが一躍表舞台に出たことである。脂評本の発見、とりわけ「甲戌本」と「庚辰本」は、他の版本に比べて大量の脂評があったために、最も貴重な版本とみなされている。そのため、行き詰まったかにみえた版本学は脂評及び脂硯齋の研究を重視することとなり、ひいてはそれが『紅樓夢』本来の姿を復元することができるようになった。

三 『紅樓夢』研究の四ジャンルについて（2）

——脂学・探逸学・曹学

脂学とは、脂評本、脂評本中の脂批の内容、脂硯齋をめぐる研究をいう。探逸学とは、第八十回までの本文および脂硯齋の批注等から、曹雪芹が本来予定していた、あるいはすでに完成したが失われたかもしれない第八十一回以降の内容について探求する研究である。

脂評本が発見されたことによって、旧紅学の索隱派の説を一掃し、趣味的な文学鑑賞と根拠のない人物詮索から解放され、『紅樓夢』本来の姿を読者に見せることができるようになった。脂評本をめぐる研究の意義は二つに分類できる。

まず、脂評本の発見は『紅樓夢』の版本学を本来の道に導いたこと。前述したように、脂評本が発見される前、『紅樓夢』の原本は乾隆年間に活版印刷された百二十回版本（程高本）と信じられていた。しかし、脂評本の発見が、曹雪芹の生前の最後の定本は百二十回ではなく前八十回であったということを我々に知らしめた。

次に、脂評本には大量の脂批が保存されており、作者の真の姿、創作過程、小説素材の源、時代背景、表現手法などを解明する大きな手がかりと

『紅樓夢』の思想的研究序論

なったこと。特に、脂批を深く研究することによって、『紅樓夢』の思想的研究、ひいては曹雪芹の思想研究にとって貴重な資料となる²¹⁾。

では、小説の評点としての脂批が『紅樓夢』の思想を解明するのにこれほど価値があるのはなぜか。

一般的な小説批評は作品が世に出た後、あるいは作者没後に後世の批評家たちが作品の内容や背景などについて評論を加えることである。しかし、『紅樓夢』は実は作者と評者との共同作業によって生まれた作品である。曹雪芹と脂硯齋はほぼ決まった創作形式——すなわち曹雪芹が草稿を修正・改定するたびに、脂硯齋が一度全体的に閲評するという形で、脂批と寄り添いながら同時に書かれたものである。『紅樓夢』は創作と評論・解説が同時に行われるという独特の手法で生まれたため、脂批の内容がいかに作者に近いものであったかがわかる。

脂批が発見されるまで、そもそも『紅樓夢』の作者が曹雪芹であることすら明らかではなかった。当時の政治的状況にあって、曹雪芹は小説全編を通して故意に読者を迷わす手法を駆使し、その真意を隠したからである。

例えば、曹雪芹は第一回で「(私は)十年にわたって批閲し、五回手直しした(批閲十載、増刪五次)」というだけであり、作品の作者だとはいわない。そのため、脂評本が発見されるまで『紅樓夢』の真の作者は不明であった。もし、脂硯齋の脂批(解説)がなければ、作者のことに限らず、小説の真の姿を見逃していたかもしれない²²⁾。脂評本の脂批は作品の真の作者が誰かという大きな謎を解いただけでなく、より正しく、より深く作品を理解する方向に導いてくれたのである。

脂批の研究の一方で、当然のことながら、脂硯齋とはどういう人物であろうかという問題も持ち上がった。脂硯齋に関しては今も多くの謎が残ったままである。諸説あるが、曹雪芹の知己とするのが筆者の考えである。ただし、本稿は脂硯齋をめぐる研究ではないのでここでは贅言しないが、

それを裏付ける一例を挙げれば、曹雪芹が一首書き添えて題詩とした後に、脂硯齋が「ただ願わくは神が曹雪芹と脂硯齋とを再びこの世に降誕させんことを。そうなれば、『紅樓夢』は何と幸せなことであろうか（惟愿造化主再出一芹一脂，是书何幸）」と書いていることから、脂硯齋と曹雪芹とがいかに関密であったか、お互いに知り尽くした関係であったかがわかる。次に、探逸学であるが、脂批や前八十回の本文などから曹雪芹の原意による第八十一回以降の内容を推定する研究のことである。『紅樓夢』の第八十一回以降は全て散佚して見ることができないが、初稿またはその一部はできていたとするのが今日では定説となっている。その根拠として次の三点が挙げられる。

- (1) 脂批が最終回の「警幻情榜」について言及していること。
- (2) 第八十一回以降の一部の題目が分かっていること。
- (3) 前八十回の脂批中に佚文からの引用があること。

以上の点からも、脂学と探逸学は一体であることがわかるが、早期版本を研究する際には必ず脂評本に言及しなければならない。

いうまでもなく、版本学と探逸学は、ともに脂硯齋の評論と深く関わっているから、両者に介在する脂硯齋という人物の研究が必然的に生ずる。しかも、脂硯齋以外に、写本に別の批注を加えた複数の人物²³⁾の存在も明らかとなっており、彼らの批注も脂学の対象となる。

また、曹学では、曹雪芹の生涯、および祖父曹寅の経歴を研究することによって、曹雪芹が曹寅からいかなる影響を受けたか、『紅樓夢』の中でその影響がどのように反映されているか、曹寅と老荘思想、とりわけ『莊子』との関係などを明らかにできれば、『紅樓夢』にみられる『莊子』の世界を読み解くための鍵が見つかることは間違いないだろう。

すでにみたように、『紅樓夢』研究が四つのジャンルに分かれるとはいえ、それらは無関係に存在するものではない。周汝昌（1918～2012）は、

『紅樓夢』の思想的研究序論

版本の研究は原本の文字や文体を回復し、八十回以後の研究は原著の精神をより明確にさせるのに有益であると、版本学、探逸学、脂学三者の関係を概括している。

版本を研究する目的は、作品本来のものに近づけることであり、八十回以降の探逸研究は、原著の全体の思想の輪郭と筋とを明らかにするためである。しかし、脂硯齋を研究することは、版本学・探逸学・脂学の三者すべてにとって非常に必要性のあることである。

研究《石头记》版本，是为了恢复作品的文字，或者说‘文本’；而研究八十回以后的情节，则是为了显示原著整体精神面貌的基本轮廓和脉络。而研究脂硯齋，对三方面都有极大的必要性²⁴⁾。

また、劉夢溪（1941～）も四者の総合的研究の重要性を以下のように指摘している。

『紅樓夢』の早期抄本と其中的脂批を研究することは、『紅樓夢』の成書過程を理解するだけでなく、この作品の思想性、芸術表現の特徴を深く理解するために、重要な意義がある。

研究《红楼梦》早期抄本和这些抄本上的脂批，有助于了解《红楼梦》的写作和成书的过程，对深入理解这部作品的思想性质和艺术表现特征，具有重要意义²⁵⁾。

版本学・探逸学・脂学・曹学，それらは相互に密接に絡み合っている。四ジャンルの研究成果を総合的に理解してはじめて、『紅樓夢』をより深く理解することができるということであるが、その中でも筆者がとりわけ重要視するのが曹学である。作者の生まれ育った環境、家族の歴史、作品

を書いていたころの社会背景、あるいは作者の学問がどのようにして蓄積され、作者の思想がどのように育まれたかを知ることができなければ、作品を正しく理解することができないからである。

ただ、作者自身の資料はほとんど残っておらず、現存するわずかな資料だけでは、曹雪芹の生涯はみえてこない。しかし、乏しい資料とともに、版本の比較により作者の創作時代を知ることができるだけでなく、現存の八十回の脂批により、八十回以後の内容を探索することもでき、それによって八十回までには出てこなかった作者の真意を知ることができる。更に、脂評本の研究にあらわれた曹雪芹の創作過程や心境を知ることができるだけでなく、曹雪芹が直接友人に送った詩の一言半句の中に、作者が遭遇したできごとを知り、そこから作者の性格や考え方をたどることができ、作者自身の姿を浮き彫りにすることができるだろう。それらの研究を総合的にすることが、『紅樓夢』中に見え隠れする老莊思想の真の意味を解明することに有効であろう。

四 問題提起——思想的研究の必要性

ところで、『紅樓夢』を中国文学・哲学研究の対象として世に問われるようになったのは、王国維の『紅樓夢評論』がきっかけである。それが始めて世に出たのが1904年であるから、現在までおよそ百年の歴史である。すでに述べたように、王国維の『紅樓夢評論』が世に出るまでの百年間に、この作品に評論を加える読者も現れた。その代表的人物として周春と王希廉²⁶⁾があげられる。彼らは主に随筆形式で作品に意見や感想を書き、細部にわたって読み方を提示したりしているが、作中の人物が実在の誰に似ているとか、どの詩詞が巧みであるとか、その多くは文人的な詮索に終わっている。この間の事情を伊藤漱平は以下のように概括している。

『紅樓夢』の思想的研究序論

脂硯齋らを別とすれば、周春の『閱紅樓夢隨筆』（乾隆五十九年）が最も早く、嘉慶年間には無名氏の評を付した刻本も現れたが、道光十二年（一八三二年）には王希廉（雪香、護花主人）の評本が刊行され世に行われた。遅れて道光の末年、張新之（太平間人）の評本が現われ、光緒年間には「王本」に姚燮（梅伯、大某山人）の評を併せたもの、また、王・姚の評に張評を併せたものなど、評本が盛んに行われた。これらのうち、王希廉の評には少しく採るべき点もあるが、後出の評家のそれは多く趣味的な詮索に墮し、批評としての価値はさほど認めがたい²⁷⁾。

これらの評論は、単なる感想、あるいは趣味的な評論であり、研究には至っていない。ところが、1904年、王国維が『紅樓夢評論』を発表し、『紅樓夢』は初めて文学・哲学の研究対象となった。そこには『紅樓夢』研究にとって画期的な論点があった。

王国維『静庵文集』の自序によると、王国維はショーペンハウエルの著書を愛読し、ショーペンハウエルの哲学に基づいて『紅樓夢評論』を書いたという²⁸⁾。

わが国民の精神は、世間的に樂をすること、樂天的に生きることにあ
る。だから、その精神を代表する戯曲や小説は、どれもこれも樂天的
な色彩を帯びている。悲しい話で始まっても、最後は必ずハッピーエン
ド、主人公が離散する話で始まっても、いつしか大団円を迎え、ど
んな困難があっても、結局は順調になるというパターンである。すべ
て読者の気持ちに銜う結果にほかならない。……ところが、『紅樓夢』
は哲学的で宇宙的、かつ文学的である。これは『紅樓夢』がわが国の
国民性に大いに背いているからであり、その真の価値もまたここにあ

る。

如上章之说，吾国人之精神，世间的乐，乐天的乐也。故代表其精神之戏曲小说，无往而不著此乐天之色彩；始于悲者终于欢，始于离者终于合，始于困者终于亨，非是而欲贖阅者心，难矣！……，《红楼梦》，哲学的也，宇宙的也，文学的也。此《红楼梦》之所以大背于吾国人之精神，而其价值亦即存乎此。（俞晓红《王国維〈紅樓夢評論〉箋說》）

当時の、そしてそれ以前の中国小説は、ほとんどが大団円形式をとって、悲劇とよべる作品はなかった。ところが、曹雪芹は当時の小説の作法に従わず、『紅樓夢』をあえて悲劇的作品に仕立てあげた。中国人はみな大なり小なり団円を好んだため、古いしきたりに従う千篇一律の文章を書いていた。そんな中で、『紅樓夢』は古いしきたりを打ち破った。それは中国文学界では画期的なことであり、果たして中国文学史上まれにみる悲劇的作品となったのである。王国維は『紅樓夢』と歴代の小説との大きな違いをはじめて見破り、『紅樓夢』を悲劇の中の悲劇だと断定した。

また、王国維は別のところで、『紅樓夢』の徹底的な悲劇性を次のように指摘している。

『紅樓夢』という書は、一切の喜劇と正反対であり、徹頭徹尾、悲劇である。その主旨は上章に述べたように、読者は知っているはずである。主人公のみならず、作中に同上するすべての人物は、生活上での欲求と相関関係にあり、苦痛に終始しないものがない。……だから『紅樓夢』という書は、徹頭徹尾、悲劇である。

《红楼梦》一书，与一切喜剧相反，彻头彻尾之悲剧也。其大宗旨如上章之所述，读者既知之矣。除主人公不计外，凡此书中之人，有与生活之欲相关系者，无不与苦痛相终始，……，故曰《红楼梦》一书，彻

『紅樓夢』の思想的研究序論

头徹尾的悲劇也。(同上)

王国維は初めて『紅樓夢』と、『牡丹亭』、『長生殿』、『西廂記』などの古来の通俗小説とをはっきりと区別し、千人が千人同じ顔のような従前の文芸作品と全く違う『紅樓夢』を特別の存在と認めた。『紅樓夢』は中国の国民性に背き、これまで現実社会を粉飾して真相を反映してこなかった中国文学作品の真の姿を、徹底的に示してくれたというのである。王国維は『紅樓夢評論』において、『紅樓夢』を生之苦痛とその解脱への道を展開した作品であると位置づけたが、これは『紅樓夢』研究史上の一里塚とみなされる。

もうひとつの画期的な論点は、あまり意味ない索隱研究よりも、作者のこと、作品の歴史的背景に注目して研究すべきだと主張したことである。それ以前、『紅樓夢』の登場人物を歴史上の實在の人物に結びつけようとして、現存する某々家のことを暗示したり、あるいはまた実際の政治的事件との関連性を見いだそうとして、いわゆるモデル詮索をする索隱考証が盛んであった。王国維はそれを批判し、『紅樓夢』の作者を考証する研究こそもっとも有意義であると、次のように提言した。

作者の姓名や創作の時期などは、この書の読者が知るべきことである。これは、主人公の姓名よりもっと重要である。ところが、これらを考証する者が一人もない。これは理解に苦しむ。

『紅樓夢』はわが国の美学上の唯一の著作であり、その作者の姓名、著書の年月は唯一の考証の目的になるべきである。

若夫作者之姓名，与作书之年月，其为读此书者所当知，似更比主人公之姓名为尤要。顾无一人为之考证者，此则大不可解者也。

而《红楼梦》自足为我国美术上之唯一大著述，则其作者之姓名，与其

著书之年月，故当为唯一考证之题目。(同上)

このように王国維は繰り返し作者自身を考証すべきだと呼びかけ、後続の研究者に作者に対する関心を喚起し期待した。果たして王国維のこの提言は、後の考証に基づく新紅学を啓発した。

新紅学の唱導者である胡適（1891～1962）は王国維のこの研究を継承し、『紅樓夢評論』発表の十七年後（1921年）、『紅樓夢考証』を発表、胡適『紅樓夢』の作者が曹雪芹であること、『紅樓夢』は曹雪芹の自叙伝小説であることを論証したのである。そして、胡適と共に新紅学の基礎を作った俞平伯（1900～1990）は1923年に『紅樓夢辨』を著して、八十一回以降の内容を推定する研究、いわゆる探逸学の先鞭をつけた。以後、多くの紅学学者によって研究が進み、『紅樓夢』研究は中国文化略図として世界中で盛んになり今に至っている。

ところで、1980年、アメリカのウィスコンシン大学で開催された第一回国際紅学会において、俞平伯は次のように発言している。

『紅樓夢』は歴史、政治、社会、それぞれの角度から研究することができますが、もちろん元々文芸の範疇で、あくまでも小説です。しかし、その思想性を論ずれば、それは哲学に関することです。これは重要であるはずなのに、過去の研究はその方面にあまり触れてこなかったようです。……『紅樓夢』が世に問われてから、論者紛々、それを「紅学」と称するものの、その核心は今なお明らかではありませんし、未だ正確な評価も得られていません。今後、文学と哲学の両方面から研究がなされるべきでしょう。

《红楼梦》可从历史，政治，社会各个角度来看，但它本身属于文艺的范畴，毕竟是小说；论它的思想性，又有关哲学。这应是主要的，而

『紅樓夢』の思想的研究序論

過去似乎说得较少。……《红楼梦》行世以来，说者纷纷，称为‘红学’，而其核心仍缺乏明辨，亦未得到正确的评价。今后似应多从文，哲两方面加以探讨²⁹⁾。

兪平伯が指摘しているように、これまで「紅学」の学者たちには『紅樓夢』の思想的探求には興味がなかったようだ。そのため、思想面での観点が見落とされ、その研究はあまり顧みられることがなかった。

しかし、中国で初めて文学批判の角度から『紅樓夢』の研究に貢献した王国維もまた、「『紅樓夢』は哲学的であり、宇宙的である（《红楼梦》哲学的也，宇宙的也。）」³⁰⁾と、つとに『紅樓夢』の哲学研究の必要性を指摘していた。

「旧紅学」の王国維も「新紅学」の兪平伯も指摘するように、『紅樓夢』の哲学思想を分析することがこれからの課題であると考え。中国の文学作品は中国の伝統的哲学思想を基盤にしているのだから当然のことである。『紅樓夢』について言えば、極論すれば、その核心は『莊子』の思想である。

『紅樓夢』を読んでいると、多くの場面で『莊子』の世界が反映されていることに気づく。たとえば、興味深い脂評は次の一文である。

これまでの古い小説のしきたりを真に打破する。それがこの小説最初からの本意である。その筆致は『莊子』、『離騷』を次ぐものである。开卷一篇立意，真打破历来小说窠臼。阅其笔，则是《庄子》，《离骚》之亚³¹⁾。

これは第一回の脂評の一文である。曹雪芹は第一回において、才子と佳人の旧態然とした恋愛小説のしきたりを「堅苦しい理屈の通らぬ美文調

(开口即者也之乎，非文即理)」と痛烈に諷刺し、本作品とその他の小説との別を明言している。『紅樓夢』のはじめから、曹雪芹は大胆にこれまでの小説の仕組みを批判し、中国古典文学作品の陳腐な書き方を「千篇一律，似たり寄ったり（千部共出一套）」、「人情からかけ離れて矛盾だらけ（悉皆自相矛盾，大不近情理之话）」と揶揄する。それだけでなく、『紅樓夢』は人と人との出会いと別れ、喜びと悲しみ、栄枯盛衰などをありのままに描いており、道徳的な説教臭が一切なく、人間の真実を見失わない小説である³²⁾。

しかしながら、中国では伝統的に小説は正統な学問として認められなかった³³⁾。ところが、脂硯齋はその優れた文学性・思想性を高く評価し、大胆にも『紅樓夢』は『莊子』や『離騷』に匹敵する作品だと断言した。

脂硯齋のこの見解は、王国維が指摘した『紅樓夢』の悲劇性と重なる。すなわち、『離騷』の神秘的で幻想的、そして悲劇的な世界と『紅樓夢』全編の世界は酷似している³⁴⁾。そして、脂硯齋が『紅樓夢』の筆致や立意は『莊子』に並ぶものというように、脂評はいち早く『紅樓夢』に『莊子』の世界を見いだした評論である。

さて、『紅樓夢』八十回の中で、『莊子』の一文を引用したり、『莊子』の一語を引いて話を展開したり、あるいは直接引用はしないが『莊子』を彷彿とさせる場面は十六箇所以上ある。『莊子』の言葉やエピソードを引用している場面は言うまでもないが、直接引用していないものの、明らかに作者が『莊子』を意識して書いていると察せられる場面にはしばしば出くわす。莊子の思想こそ『紅樓夢』の核心であると考えに至った筆者は、以下のように四章に分けて論ずる。

第一章 『莊子』肱篇続作の意味（第二十一回）

『紅樓夢』第二十一回に、主人公宝玉が『莊子』肱篇を書き続けるという場面がある。その続作は肱篇の寓意と一体となり、第二十一回の筋

『紅樓夢』の思想的序論

に自然に溶け込んでいる。『莊子』を熟知する作者は主人公の筆を借りるという斬新な手法を用いて肘篋篇を書き続け、主人公がいかに『莊子』の世界にあこがれていたかを描いた。また、第二十二回の脂評からも宝玉の生き方、すなわち莊子の理想が『紅樓夢』全編に見え隠れしていることがわかる。このように、宝玉の思惟方法も人間観も、その根底に莊子の思想が横たわっている。

第二章 『紅樓夢』における「無用の用」

第二十二回に『莊子』列禦寇篇と人間世篇を引用したくだりがあり、それらを分析すれば主人公宝玉の心理を明らかにすることができる。さらに、第二十二回にみえる「無用の用」の思想は、実は『紅樓夢』全編にわたっている。たとえば、第一回で宝玉が無用の石ころの生まれ変わりとして設定されていること、第五回にみえる登場人物の数奇な運命を暗示する詩、第五十四回に口の達者な嫁は孫悟空の尿を飲んだという辛辣なジョークなどなど、曹雪芹は現実社会の「無用の用」を描き出すことで社会の不条理を暴き出そうとしている。

第三章 范成大「重九日行宮壽藏之地」と王梵志「無題」二首（第六十三回）

錢鐘書は范成大的詩中の「鉄門限」が「王梵志の二首の詩」によるというだけで、その詩題をいわないが³⁵⁾、それが『全唐詩補逸』巻第二に載せる二首の「無題」詩に基づくことを検証した。更に、王梵志の「道情詩」はより莊子の世界に近く、范成大的詩に少なからず影響を与えた作品であることを発見した。もちろん、これは『紅樓夢』研究にとって不可欠という訳ではないが、『紅樓夢』における『莊子』の世界を解明する上では非常に貴重である。その二首及び「道情詩」を読み解くと、王梵志の詩の世界がより莊子の世界に近いことがわかる。そのことを踏まえた上で、曹雪芹が妙玉に「漢、晋、五代、唐、宋以来、古人の作った詩にいい詩はない

が、ただ二句だけいいのがある」と高い評価をさせたことを理解すれば、それは作者が范成大の詩を借りて荘子の世界にあこがれているかを吐露するものであることがわかる。

第四章 曹寅と曹雪芹

曹寅（1658～1712）は曹雪芹の祖父である。曹寅の生涯とその詩集『棟亭集』を解説することによって、曹寅もまた荘子の世界に憧れた文人であったことが明らかである。曹寅没後に生まれた曹雪芹は、曹寅から教育を受けたことはなかったが、祖父の影響を受けて育ったことは間違いない。宝玉の人物像が曹雪芹の自画像であるとは定論であるが、筆者は宝玉の人物像と曹寅の人物像とが重なることに気づいたからである。曹雪芹がその祖父からどのような影響をうけたかを知ることは、『紅樓夢』にみえる『莊子』の世界を解明するうえで大きな手がかりとなるに違いない。

注

- 1) 龔自珍（1792～1841）も、「避席畏聞文字獄，著書只為稻粱謀」（「己亥雜詩」の「詠史・金粉東南十五州」一首）と、当時の知識人がいかに文字の獄を恐れていたかを詩に詠んでいる。
- 2) 柳詒《中国文化史》（東方出版中心，1996年）p 731
- 3) 「中国人は得意の時には儒家となり、失意の時には道家となると言われている。事實、その例は賈誼や司馬遷の場合にも見られた。……しかし事實について見れば、同一人格における儒家から道家への移行は、論理の矛盾を犯さずに實現しうるのである。」（森三樹三郎氏の『上古より漢代に至る性命觀の展開』（創文社，昭和四六年）p 328
- 4) 周春（1729～1815）」は乾隆59年（1794）に中国初の紅学專著である『閱紅樓夢隨筆』を著し、『紅樓夢』は康熙年間の靖逆侯・張勇の家事であると提唱し、その考証方法が索隱派に引き継がれた。1916年北京大學學長になった蔡元培（1868～1940）は同年、「石頭記索隱」を発表し、『紅樓夢』は反清復明を主張した小説であると提唱。王国維については、本論に詳述。
- 5) 孫玉明《日本紅学史稿》（北京圖書館出版社 2006年）参照。『紅樓夢』の

『紅樓夢』の思想的研究序論

邦訳誕生を手がかりに時代分けを試みたもの。

- 6) 伊藤漱平訳『紅樓夢』(上)の「解説」参照。p 583
- 7) 原本のもとの所有者俞明震で、上海有正書局の主人・狄葆賢がこれを入手し、民国元年(1912)に石印した。これが「有正本」で、民国元年出版の大字本と民国9年(1920)出版の小字本とに分かれ、いずれも全八十回。
- 8) “对《红楼梦》进行了细致的考察和研究。范围之广，几乎涉及到了当时的历史，政治，文化，艺术，科学，宗教等各个领域，……作为20世纪30年代日本红学界的代表人物，在日本红学史上，大高岩仍然占有十分重要的地位” (孙玉明 前掲書 p 64)
- 9) 『北海道大学外国語外国文学研究 2』, 1954年
- 10) 同性に関心を示すのは必ずしも宝玉に限らず、他の登場人物にも見受けられるが、これは『紅樓夢』の独自性ではないので、筆者は宝玉を「性同一障害者」として特定して『紅樓夢』全体を解釈することに疑問を覚える。
- 11) 周汝昌《什么是红学》(《河北师范大学学报》1982年第三期)による。後に《红楼梦与百年中国》(中央编译出版社, 2005年)に収録。
- 12) 『紅樓夢』版本の底本となっている脂評本, すなわち手抄本『脂硯齋重評石頭記』は、ページの余白に脂硯齋が書いた評語・注釈・感想を書き付けている。
- 13) 程偉元と高鶚とによって整理された版本。程偉元(1742?~1818?), 字は小泉, 江蘇省呉県の人。科挙試験に挫折し, 書院の教師としてその生涯を終えたといわれる。乾隆末年に寄寓した北京で『紅樓夢』百二十回の写本を入手した。高鶚(?~1815?), 字は蘭墅, 号は紅樓外史。乾隆56年(1791年), 程偉元に協力して『紅樓夢』の補訂作業に従事し, 萃文書屋より百二十回『紅樓夢』を刊行した。これが「程高本」である。
- 14) 「程高本」序に, “《红楼梦》小说本名《石头记》, 作者相传不一, 究未知出自何人, 惟书内记曹雪芹先生删改数过。好事者每传抄一部, 置庙市中, 昂其值得数十金, 可谓不胫而走者矣。”(《校注新镌全部绣像红楼梦》中华书局, 2001年)とある。
- 15) 1754年は「甲戌本」成立の年と考えられ, 転写された年ではない。先に述べた「最も古い抄本は, 曹雪芹没後間もない1764年(一説に1763年)に流布していた八十回の抄本」の1764年(一説1763年)は転写された年である。
- 16) “红楼梦旨义, 是书题名极多。一曰《红楼梦》, 是总其全部之名也。又曰

- 《风月宝鉴》，是戒妄动风月之情。又曰《石头记》，是自譬石头所记之事也。此三名皆书中曾已点晴矣。”（《脂砚斋重评石头记 甲戌校本》（作家出版社，2004年）の「凡例」）
- 17) 刘梦溪《红楼梦与百年中国》によれば、「南京靖应鹑藏本」は揚州の靖应鹑の家に収蔵していたもので、友人の毛国瑤が1959年に閲読して、他本にはない批語がみえること、本文中に異文があることなどを俞平伯に伝えたが1964年である。しかし、毛氏が再び靖家を訪問するとすでになく、今なお不明である。
 - 18) 前掲伊藤漱平訳『紅樓夢』（上）の「解説」、及び前掲《脂砚斋重评石头记 甲戌校本》を参照。
 - 19) 《红楼梦》（人民文学出版社，2008年）の《前言》に，“当然上面所说的己卯本，庚辰本，甲戌本等名称，其干支年代，都不能代表现有这些本子的抄定年代，都只能表明它们的底本的年代，这一点早已为红学家们指出了。”とあるように、干支年で命名された抄本は、抄写年ではなく、もともとなったテキストの年代を示している。
 - 20) “比如，现存十一种脂评本，它们各自的底本渊源和相互之间的流变关系到底是怎样的？它们和程高本之间，又是怎样一种具体的演变过程？这在当前海内外红学界，可以说还没有理出一个真正的头绪来。（《脂砚斋重评石头记 甲戌校本》p 13）
 - 21) 《脂砚斋重评石头记 甲戌校本》の校訂者鄧遂夫は，“可以通过对脂批地深入研究，较为准确地揭示这部奇书的诸多奥秘——包括作者真相，创作过程，素材来源，时代背景，表现手法，以及透过这些手法所传达的思想艺术内涵，等等，尤其最后两项，即通过脂批去揭示此书独特表现手法和潜在的思想艺术内涵，我以为是脂评本研究的重中之重。”と指摘する（《导论》p 14）。
 - 22) 若云雪芹披阅增删，然则开卷至此这一篇契子又系谁撰？足见作者之笔，狡猾之甚。后文如此处不少。这正是作者用画家烟云模糊法处，观者万不可被作者瞒蔽了去，方是巨眼。（《脂砚斋重评石头记 甲戌校本》p 84）
 - 23) 主要的批家是脂砚斋和畸笏叟两个人，此外还有梅溪，松斋，鉴堂，王兰坡，绮园，立松轩等。（刘梦溪《红楼梦与百年中国》所收《考证派红学的危机与生机》中央编译出版社，2005年 p 132）
 - 24) 周汝昌《石頭記探逸·序》（山西人民出版社，1983年）
 - 25) 刘梦溪《红楼梦与百年中国》（中央编译出版社，2005年） p 133

『紅樓夢』の思想的研究序論

- 26) 王希廉（1805～1877）呉県東山人。詩文を好み、『紅樓夢』を評論したことによって、自ら「護花主人」を号とした。
- 27) 伊藤漱平訳『紅樓夢』（上）（平凡社、1994年）の「解説」p 581
- 28) “余之研究哲学，始于辛壬之间（辛丑壬寅年之间1901～1902年）。癸卯（1903）始读汗德之《纯理批评》，苦其不可解，读几半而辍。嗣读叔本华之叔而大好之，自癸卯之夏以至甲辰（1904）之冬，皆于叔本华之书为伴侣之时代也。……，去夏所作《红楼梦评论》，其立论虽全在叔氏之立脚地，然于第四章内已提出绝大之疑问，旋悟叔氏之说，半出于其主观的气质，而无关于客观的知识，……”（俞晓红《王國維紅樓夢評論箋說》中華書局，2004年）p 1
- 29) 梅新林《红楼梦哲学精神——石头的生命循环与悲剧指归》（学林出版社，1995年）p 5
- 30) 俞晓红前掲書 p 87
- 31) 《脂砚斋重评石头记 甲戌校本》p 83
- 32) 本稿で引用する『紅樓夢』の日本語訳は飯塚朗訳『紅樓夢』（集英社，1980年），中国語は《红楼梦》（人民文学出版社 2008年）による。
- 33) 『漢書』藝文志に、「小説家者流，蓋出於稗官。街談巷語，道聽塗說者之所造也」とあるように，小説はもともと巷間で語られる「つまらないお話」という意味で，およそ学問の対象とはならなかった。
- 34) 『紅樓夢』にしばしば登場する『離騷』・『九辯』・『秋水』なども『紅樓夢』の関係を研究するのは大きなテーマであろうが，ここでは触れない。
- 35) “例如他的《重九日行营寿藏之地》说：“纵有千年铁门限，终须一个土馒头”；这两句曾为《红楼梦》第六十三回称引的诗就是搬运王梵志的两首诗而作成的，而且“铁门限”那首诗经陈师道和曹组分别在诗词里采用过，“土馒头”那首诗经黄庭坚称赞过。”（《宋诗选注》人民文学出版社 1989年）p 195

本稿は博士前期課程の研究成果の一部であり，第391回阪神中哲談話会（2011年6月25日）における研究発表「『紅樓夢』にみられる『莊子』の世界」に加筆したものである。

Introductory Study of the Philosophy of *Dream of the Red Chamber*

WANG Zhu

Looking back over the history of Chinese studies of the philosophy of *Dream of the Red Chamber* 紅樓夢, we can find *Commentary on the Dream of the Red Chamber* 紅樓夢評論, written by Wang Guowei 王国維, which treated the novel in the context of Chinese literature and philosophy. Building on from Wang Guowei's study, Hu Shi 胡適 established a new research method for approaching the novel, demonstrating not only that the author of *Dream of the Red Chamber* was Cao Xueqin 曹雪芹, but also that the novel should be considered as Cao's autobiography. After that, many more scholars took up the study of *Dream of the Red Chamber*, and it is now recognized throughout the world as a reflection of Chinese culture rather than just a novel.

Various genres for the study of *Dream of the Red Chamber* have appeared over the years since research began, but research into the philosophy that underlies the book has lagged far behind even though it has been long been considered important by scholars. Together with basic comprehension of the standard genres for approaching the book, this paper, by making a detailed study of Cao Xueqin's favorite work of philosophy, *Zhuangzi* 莊子, will seek to gain a better understanding of *Dream of the Red Chamber*.

In the eighty chapters of *Dream of the Red Chamber*, there are at least sixteen situations which refer directly or indirectly to *Zhuangzi*, and many more situations which reveal Cao Xueqin's *Zhuangzi* consciousness. Believing that the philosophy of *Zhuangzi* is the key to understanding *Dream of the Red Chamber*, the paper undertakes a detailed study of the situations in which Cao Xueqin's debt to *Zhuangzi* may be identified.